

トレセン合宿 頸椎損傷

レスリング 学生王者、胸から下動かさず

日本レスリング協会が今年9月、東京都北区の味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）で行った強化合宿で、拓殖大3年の男子選手①が頸椎損傷の大けがをしていたことが21日、複数の関係者への取材で分かった。けがをしたのはグレコローマンスタイル85kg級の全日本学生王者。現在も入院中で胸から下を動かすことができず、深刻な後遺障害が残る可能性もある。NTCが開校された平成20年1月以降、最悪の事故とみられる。

男子選手が事故に遭ったのは9月13日。今年の世界選手権に出場した代表選手とのスパarring中に頭から落ち、病院へ救急搬送された。強化合宿には学生選抜の一員として参加していた。協会は重大事故として日本オリンピック委員会（JOC）や、NTCを管理する日本スポーツ振興センターを通じて、スポーツ庁に報告したが、一般には公表していなかった。協会幹部は産経新聞の取材に対し「スパarring相手の心のケアも含めて、できる限りの対応を協議している。治療に専念できるように、適用できる保険などの情報も必死に集めている」と話した。

国の補償制度なし

2020年東京五輪まで3年を切る中、レスリングはTTCで深刻な事故に見舞われた。国が設置した施設だの学生選手が強化拠点のNが、事故の補償制度を国は

設けていない。任意加入の保険はあるものの、死亡時や後遺障害への補償が手厚いとは言い難い。今回のケースでは、治療やリハビリの費用負担に加え、後遺障害の補償も視野に入れた対応が必要だが、日本レスリング協会の幹部は「リスクが高い格闘技では保険料も高くなる。競技団体がカバーするには限界もある」と頭を抱える。

学生選手を支える態勢も不十分だ。学生の部活動は「課外活動」とみなされ、安全面では責任の所在が曖昧だ。保険料の負担も、所属する大学が選手個人が国内競技団体かは、対応が分かれる。

米国では、大学スポーツで多発する負傷や死亡事故に対応する組織として、20世紀初頭に全米大学体育協会（NCAA）が発足した。スポーツ庁も平成30年度を目標に「日本版NCAA」設立を掲げ、保険加入などの窓口一本化を目指す。

庁内のワーキンググループは競技ごとの事故情報などを集め、死亡時や後遺障害について、どの程度までカバーする保険が必要かを検討。スポーツ庁の担当者も「少なくとも安全・安心と学業が両立できる環境は、できるかぎり早く整えたい」と話す。

日の丸を背負う覚悟で練習に打ち込む学生アスリートたちを取り巻く環境は不安定だ。重大事故への対応は最優先で進めなければならない。（川峯千尋、田中充）

脊髄損傷まひ 抗体で回復

脊髄損傷で手の指の運動機能を失ったサルに対し、神経の再生を促す抗体を投与したところ、指の機能を回復させることに成功したと、京大の高田昌彦教授（神経科学）や大阪大のグループが発表された。5日付の英専門誌電子版に掲載される。

脊髄損傷は事故やスポーツなどで脊髄の中枢神経が傷つき、手や足のまひの原因になる。国内の患者は20万人以上で、毎年5千人超が新たな患者になっていると推計されるが、有効な治療法は確立されていない。

グループは脊髄損傷後に、損傷

京大など サルの神経再生

脊髄損傷のサルが運動機能を回復するイメージ

タンパク質「RGMa」の働きを阻害する抗体投与



餌をつまみ上げられる

部に増加し神経の修復を妨げるRGMaというタンパク質に着目。このタンパク質の働きを抑える抗体をマウスから作製し、サルに使用した。

いずれも手の指がまひした脊髄

損傷直後のアカゲサル4頭に対して、4週間にわたりチューブを使って直接患部に抗体を投与。その結果、約2カ月半後には、小さな隙間に入れた餌を指でつまみ上げる細かい動作ができるようになる。損傷前に近い状態まで運動機能が回復した。

グループは、傷ついた神経が投与後に再生し、筋肉の動きなどを支配する神経と接続したことを確認した。

高田教授によると、この研究に関連し、グループは田辺三菱製薬とヒト用の抗体を開発。脊髄の中枢神経が、がん転移による圧迫で損傷した患者に対し、早ければ年内にも阪大が中心となって臨床試験（治験）を始める。北米でも治療が行われる予定だ。